

【TAXI】

マチダ。焦っている。追っ手を気にしながら、慌ててタクシーを探す。

ない。月がみあたらない。それなのに妙に明るい。雲のせいかな。いやに明るい。
右手を上げる。陽気なメロディー。タクシーが1台、マチダの前に横付けされた。
義務。後部座席のドアが開いた。マチダは乗り込む。
後ろ頭の運転手が聞いてきた。

「どちらまで」

マチダも声だけで答える。

「ああ、ミライ。未来まで」

左手。白い手袋の左手が、音もなく動いた。カーナビをつつく。

「ご住所は？」

「そんなものないよ。ミライだよ。わかるだろ？」

「ああ。ミライですか。はいはいはい」

「ちょっと急いでいるんだ。どれくらいで着く？」

「さあ、まあ、すぐだと思いますよ」

「そうか、そうか」

「ナビだとね、住所を入れると、分かるんですよ。距離と、時間と」

「住所なんてないってば」

「ええ、そう、だからまあ、すぐだと思いますよ」

「まあいいや。とにかく急いでくれれば」

ギア。サイドブレーキ。アクセル。発進。

急発進した。

「おっと！」

「失礼」

「気を付けてくれよ。まったく」

Doooooooooooooooooriveeeeeeeeeeeeeee

マチダはソワソワしている。時々後ろを気にしている。

「ねえ」

運転手は気がつかない。

「ねえ、ちょっと、おい、おいって！」

車が急停止する。

「おっと！」

「失礼。なんですか？」

「運転荒いな！」

「すみません。お急ぎだと言うので」

「急いでるけど」

「そうですか。では」

ギア。サイドブレーキ。アクセル。発進。

急発進した。

「おっと！」

Doooooooooooooooooriveeeeeeeeeeeeeee

「ねえ」

運転手は気がつかない。

「ねえ、ちょっと、おい、おいって！」

車が急停止する。

「おっと！」

「失礼。なんですか？」

「俺の話聞いて？」

「聞いてます。訊いてます」

「ならよかった」

「はい。では」

ギア。サイドブレーキ。アクセル。発進。

急発進した。

「おっと！」

Doooooooooooooooooriveeeeeeeeeeeeeee

「おい！ だから待て！ おい！」

車が急停止する。

「おっと！」

「失礼。なんですか？」

「おちよくってる？」

「いえ。全く」

「あっそう、ならいいんだけど」

「はい。では」

「ストップ！」

車は盛大にからぶきした。

「急に声をかけないで。危ないですから」

「俺の！ 話！ 聞いて！」

「なんでしょう」

「ちょっと聞くけどね」

「ええ」

「この車、速いよね」

「ええ、間違いなく速いです」

「追いつかれることはまずないな」

「何に、ですか？」

「何って、いうか、何者にも、何物にも」

「まあ大抵のものは追いつけないんじゃないですかね」

「そう、そう」

「例外はもちろんありますけれど、大抵のものは」

「そうか、そうか、ならいいや。悪いね、止めちゃって。も、走って」

「では」

ギア。サイドブレーキ。アクセル。発進。

急発進した。

「おっと！」

Doooooooooooooooooriveeeeeeeeeeeeeee

「ねえ！」

「はい！？」

「この車、速いよね！？」

「速いです！」

「かなり速い方だよね!？」
「かなり速い方ですね!!」
「そう! ならいいんだ!」
「ご存知ですか!？」
「何を!？」
「光の速度です」
「ひかり!？」
「秒速30万キロです!」
「あっそう!」
「これは不変です」
「なんだって?」
「いつどこでどんな状況で誰が見ても、必ず秒速30万キロということです」
「だから?」
「タイムマシン!」
「は!？」
「タイムマシンご存知ですか!？」
「超時間機械!？」
「はい!」
「知ってるけど!」
「タイムマシンは未来に行けます」
「つまりこの車がタイムマシンだって?」
「いえ! これはただのタクシーです」
「は!？」
「乗っているものが何であろうと関係ありません。物体が光速に極めて近い速度になると、ミライに行けます」
「は!？」
「タイムマシンになれます」
「は!? おい、この音どうにかならんのか!? 耳が割れる!」
「もう少しで」
音が収束していく。代わりに、ポワワワーン……チクタク、チクタク
マチダは辺りを見回す。運転手は乱れず慌てず、姿勢を保っている。
視線。マチダは視線を感じて、ミラーを見た。
ない。顔はみえない。それなのに妙に気になる。いやに気になる。
「……音が止んだ」
「はい」
「どこだ? ここ」
「宇宙です」
「宇宙!？」
「失礼。宇宙っぽいところですよ」
「宇宙っぽいところ!？」
「ええ」
「ええ? ちょっと待ってくれよ。俺はミライまでと言ったんだ。宇宙だって? 宇宙っぽいところだ
って?」
「ええ。ですから、ミライに向かっております。タイムマシンです」
「タイムマシン……」
「相対性理論です」

「Theory of relativity.....」

「はっはっは。発音がお上手ですね」

「ま、待ってくれ。俺はミライに行けさえすればいいんだ。こんな常識はずれのマシンなんて使わなくても、ちょっとミライまで行ければいいんだよ。わかるだろ？ ミライだよ」

「ええ。ミライですね」

「急いでいるんだ。なにも宇宙っぼいところまで来なくたって」

「急いで近道しても無駄です。ミライより先については意味がない。急がば回れ理論です」

「急がば回れ理論」

「そうです。急いでも平行線では、進めば進むほど、ミライも前に進みます。1回その場で跳べば、着地点はミライです。今は跳んでいる状態です」

「そうか」

「ご理解いただけましたか」

「全然」

「残念です」

「違うんだよ」

「何がですか？」

「ミライに行きたいんだけど、そうじゃないんだ。ミライに行くことが目的ではないんだ。だから、急いでくれればいいんだよ」

「そうですか」

「解ってくれたか」

「いえ、全く」

「残念だ」

「見えてきましたよ」

「何が？」

「月です」

「月！？」

「失礼。月っぼいものです」

「月っぼいもの！？」

「ええ」

「理解できない」

「残念です。では、揺れますのでお気をつけて」

「何で揺れるんだ？」

「Uターンします」

唐突に陽気なメロディー。CMのように流れ出す観光情報。

「えー、左に見えてきますのは月。いえ、月っぼいもの。こちらは妄想、偶像、象徴でできておりまして、約数秒前この空間に作られました。見どころは何と言っても、この月っぼさ。ホンモノと見分けがつかないほど精巧に作られています」

「ほお。おや、今何か動いたような？」

「これは珍しい！ 妄想に揺らぎが見えます」

「揺らぎ？」

「ええ。さて、月の周りをぐるりとUターンしましたらば、向かうは地球一直線」

「戻るってこと？」

「そうです」

「何でだよ！」

「逆に何ですか？」

「さらに逆に何でだよ！」

「支離滅裂だ」

「誰のせいだ、誰の」

「常識的に考えてみてください。このままここにいたってしょうがないでしょう。いつかは戻らないといけないんです。当たり前でしょう。」

「そうかもしれないが」

「カモもアヒルもないでしょう」

「まっすぐ進めないのか？」

「帰るなということですか？」

「今は」

「ミライに行きたいのでは？」

「そうだけでも」

「ここにいってもミライにはいきません。お急ぎなのでは？」

「そうだけでも」

運転手は車を寄せる。バック時の「ぴー、ぴー」音。止まる。ハザードランプ「チ、カ、チ、カ」。

「では伺いますが、お客様、これがタクシーだとお分かりで？」

「当たり前だ」

マチダ、背後を気にする。

「どちらまで？」

「だからミライだ」

「お急ぎで？」

「ああ」

「それで、今なんて？」

「だから」

「ええ」

「戻るな」

「謎かけ？」

「大真面目だ」

「ご冗談でしょう。え？ ミライまで急げと言うから回り道をしているというのに、さらに回り道をしろと言うわけですか。え？」

「我ながら筋が通っていないことは分かっているさ。いや、そもそもこの車に筋が通っていない。」

「車に筋はありません」

「いちいち揚げ足を取らないで。」

「そう言えば仰っていましたね。」

「何を？」

「ミライに行くことが目的ではないと」

「ああ。言ったよ」

「言いましたね」

「追われているんだ」

「何に」

「過去に」

「過去に？」

「だからミライに行きたい」

「あっはっはっは。なるほど」

「だから止まりたくない。戻りたくない」

「なるほど」

「解ってくれたか」

「全然」

「残念だ」

「来ましたね」

「何が？」

「後ろ」

「何？」

マチダ、振り向く。何も無い。視線。マチダは視線を感じて、振り向いた。顔はみえない。それなのに妙に気になる。いやに気になる。

「何だ？」

「お客様を追っているものでしょう」

「え！？ 何で早く言わないんだ！」

「お客様が行くなと言うから」

「いいから、早く出せ！　すぐに！」

「どうされますか？」

「え？」

「Uターンしますか？　しませんか？」

「いいから、早く逃げてくれ。離れてくれれば何でもいい」

「そうはいつでも、行先は決めて頂かないと。大事な問題なので」

「わ、分かった。戻ろう……いや、ダメだ。ダメだダメだ！　近づいたら終わりだ！」

「では、このまま直進と言うことで」

ギア。サイドブレーキ。アクセル。発進。

急発進した。

「おっと！」

Doooooooooooooooooriveeeeeeeeeeeeeeeee

「ねえ、おい！」

「なんでしょう？」

「どうだ！？　離れたか！？」

「運転中です！　ご自分で確認されてください」

「情けない話だけど、怖くて見られないんだ」

「過去を振り返ることはできるでしょう」

「直視できない」

「貴方のものなのに」

「過去は過去だ。俺は俺だ。あれは俺じゃない」

「水を差すようで申し訳ないんですが」

「何だよ」

「あれは過去ではありません」

「過去じゃない！？」

「失礼。厳密に言うと過去ではありません」

「厳密に言うと過去じゃない！？」

「ええ」

「ええ？　あれは何だよ。俺が追われているものは何だったんだよ」

「あれは思い出です」

「思い出？」

「ええ。ですから貴方のものです。誰のものでもなく、マチダさんの思い出です」

音。音色が変わる。海に浮かぶような二人。

「過去と思い出はよく似ています。よく似ていますが、明らかに違います。明らかなる違いを持っています。両者は似ても似つかない別物です。言うなれば、二卵性双生児と例えることができます。言うなれば、2本のソーセージと例えることができます」

「ソーセージ……」

「失礼。ふざけました」

「どういう意味だ？」

「下ネタです」

「全く面白くない」

「残念です。ひとつお尋ねしますが」

「何だよ」

「生きるということを歩くということとして」

「歩くということとして」

「我々は道を歩いているのでしょうか。それとも、歩いたところが道になるのでしょうか」

「謎かけ？」

「大真面目です」

「歩いたところが道になる。と、答えるのが格好いいんだろうが、俺にはそんな自信、とてもじゃないが持てないな。俺は道を歩いている。ミライは道の先にある」

「あっはっはっは。なるほど」

「今のどこが面白かったんだ？」

「いや、何も。とにかく、とにまると、マチダさんの歩行は常に道の上で行われていて、過去も現在もミライも1ベクトルの上に存在するということでしょう。そうでしょう」

「だったらなんだって言うんだ」

「ということはマチダさん、貴方がこれまでしてきた良いことも悪いことも、得たものも失ったものも、あの某配管工が如く決められた道の上で、飛んだり跳ねたりしながら、得ては失い、それでも前に進み続けるその中にあるものでしょう。そうでしょう」

海の中で漂う某配管工のメインソングが流れる。

少しの間、飛んだり跳ねたり大きくなったりカメに乗ったりする。

マチダ、はたと気がつき

「待て！ その流れだと俺は、某配管工の永遠のライバルで、因縁が続き敵対心を燃やしながらも情を見せ、たまの共闘どころか最近では一緒にテニスやカートレースまで楽しみだした某カメ大魔王を倒しにいかないといけなくなる」

「失礼。ふざけました」

「全く面白くない」

「残念です。つまり、結論を言いますと」

「早く言ってくれ」

「マチダさん、過去は只のデータで、思い出は妄想の中で確かに存在する実体です」

妄想。運転手、マチダに振り返る。

マチダは初めて運転手と対面した。

「あれ、お前……」

「思い出から逃げようだなんて、間抜けな馬鹿クズ野郎ということです」

「……クロサキ」

爆音。

ギア。サイドブレーキ。アクセル。発進。

急発進した。

「おっと！」

Doooooooooooooooooiveeeeeeeeeeeeeee

「なんだ!？」

「何って、タクシーですから」

「は!？」

「貴方をお送りします」

「お送り!？」

「ミライまで」

「ああ!」

「戻ります」

「戻る!？」

「ええ。もう持ちません」

「車が?」

「貴方が」

マチダ、急に倒れる。

「おっと」

「酸素が足りないんです」

「酸素? 今更だな!」

「はっはっは。冷静ですね」

「ずっと思っているが、お前の笑いどころは明らかにおかしい」

「ここは宇宙っぽいところですから、酸素なんて初めからないんです」

「……クロサキか?」

「ええ」

「……」

「ご存知ですか?」

「何を」

「世界五分钟前仮説です」

「なんとなく」

「ラッセルは?」

「名前だけ」

「彼はこの仮説について言っています」

「……何と?」

「こんな話について真面目に語るなど馬鹿馬鹿しい、と」

「……」

「それはそうとして、マチダさんがここまで酸素を意識しなかったのは、つまり酸素が当たり前にあると無意識に思い込んでいたからです。つい1分前まで、ここには確かに酸素があった。貴方にとっては」

「よく喋るな」

「貴方は随分口数が減りました」

「……」

「そうですね、ここは宇宙っぽいところ。車から出れば死ぬ。止まっても死ぬ。殺されても死ぬ」

「お、俺を殺すのか」

「運転中です。ご自分で死なれてください」

「まっぴらごめんだ」

「僕もマチダさんの死体と一緒にミライに行くなんてまっぴらごめんです。ああ、見えてきましたね」

「何が」

「貴方を追っていたものです」

「何!？」

マチダ、急いで隠れようとする。

「通り過ぎたら言ってくれ！」

「貴方のものなのに」

「思い出は思い出だ。俺は俺だ。あれは俺じゃない」

「見えないんでしょう」

「何だよ」

「見えないんでしょう。振り返っていないから」

「煩いな！」

「見えますよ。今なら」

視線。マチダは視線を感じて、顔を上げた。

ある。顔がみえる。だから気になる。いやに気になる。

フロントガラス越しに見覚えのある顔があった。マチダは呆気にとられた。呆気にとられたというより、呆然とした。呆然したというより、愕然とした。

女、女だ。あれは見たことのある女だ。

車はどんどん女に近づいていく。女は歩いている。清楚に、優雅に、可愛らしく、慎ましく、姿勢よく、行儀よく、歩いている。車はどんどんどんどん近づいていく。

丁度、タクシーと、女がお隣同士になった時、

女はそっと微笑んだ。

「ま……待ってくれ。おい。おい！ 待ってくれよ！」

「無理です」

「お前じゃない！ お前じゃないんだ。おい！ 何でだ？ 聞こえないのか？」

車はどんどん離れていく。女は歩いていく。清楚に、優雅に、可愛らしく、慎ましく、姿勢よく、行儀よく、歩いていく。車はどんどんどんどん離れていく。

「おい！ こっちだ！ 悪かった。俺が悪かったから！ おい、窓を開けてくれ」

「無理です」

「何故」

「死にます」

「死んでもいい。窓を開けてくれ」

「無理です」

「何故！」

「私が死にます」

「ああ……」

「ご存知ですか」

「何を」

「過去と思い出の共通点です」

「何だよ」

「振り返ってみることは出来ますが、過去や思い出それ自身が振り返ることは出来ないところです。何故だかわかりますか」

「いや」

「必ず貴方は前にいるからです」

「そうか……」

「解ってくれましたか」

「全然」

「残念です」

「じゃあ戻ってくれ。俺が振り返ることはできるんだろ」

「ええ」

「戻ってくれ」

「無理です」

「何故！」

「何故？ 何故戻れないのか。ご説明いたします。こちらのスライドをご覧ください。ここが、今僕たちが進んでいる点。そしてここが、思い出が歩いているところ。先ほどすれ違ったことでもわかるように、両者が進む道は同じではありません。基本として道は一方通行。我々は過去を振り返ることは出来ませんが、過去に戻ることは出来ません。今、僕たちはUターンをただけで、逆走しているわけではありません」

「タイムマシンなのに！？」

「ミライに行くより過去に戻る方が難しいということです。やり直しはきかないということです」

「……」

「そのうちまた近づいてきますよ。きっと」

「……なんで俺はいつもこうなるんだ。なんでいつもこんなことになるんだ」

「馬鹿だからじゃないですか」

「そう思っているのか」

「どう思っていると思いますか」

「どう思っているんだ」

「一周まわってどうでもいいです、今は」

「……あんなに遠くに行ってしまった」

「そのために乗ってきたのではないですか」

「君の女じゃないのか」

「あれは彼女ではありませんから。マチダさんの思い出だ」

「クロサキ」

「なんでしょう」

「トイレに行きたい」

「ありません」

「我慢しろって？」

「我慢してください」

「近くのコンビニに停めてくれ」

「ありません」

「ちょっとそこの人工衛星で用を足すのは？」

「漏らす前に死にます」

「そうか」

「ええ」

「クロサキ」

「なんでしょう」

「殺していい？」

応える前に、マチダは運転手の首を絞めあげた。

暴力の応酬、というよりは、お互いに死に至らしめるための最善手を繰り返す。

運転手、ピコピコハンマーを取り出し、マチダに殴りかかる。ピコピコ、ピコピコ。

結構痛い。マチダは意識を失ってしまう。なおも運転手は殴る。ピコピコ、ピコピコ。

「ふう」

クロサキは一息ついて、運転席に座りなおした。結局マチダの死体と宇宙でランデブーか。

はっはっは、我ながら巧い例えだな。マチダさんに殺されかけるのは2回目だな。やれやれ、この人も懲りないな。そういえば、あのときは死んだんだっただけかな。生きてたんだっただけかな。

視線。クロサキは視線を感じて顔を上げた。マチダが背後に立っている。ピコピコハンマーを握っている。クロサキを殴る。ピコ！

クロサキは倒れる。

「知ってるか」

「何をですか」

「思い出を美しくする方法だ」

「残念ながら」

「何度も思い出すことだと」

「思い出は思い出すものでしょう当たり前でしょう」

マチダ、もう一度殴る。ピコ！

「只のデータも思い出すたびに改ざんし修繕し創作していけば、最後にはほとんどオリジナル。オマージュですらない。そう、そうだ、思い出は妄想だ。妄想でできた実体だ。そうだろう。解ってくれるか」
「……」

「残念だ」

マチダは初めて運転席に座った。アクセル良し。ブレーキ良し。ギア良し。ミラー角度良し。あ、ちょっと待った。バックミラーをクロサキに合わせる。クイ、クイ、良し、映った映った。

「ラスボスを倒しても、桃のプリンセスを忘れて帰ったんじゃ元も子もない」

某配管工のカートレースのテーマ。世代はお任せする。

マチダは車を切り替えし、道を逆走する。気分がいい。大分すっきりしてきた。鼻歌も歌える。鼻で某配管工のジャンプの音まねも出来る。プウン。

瞬間、マチダは倒れた。

クロサキが立ち上がった。身体の埃を払い払い。

「だから酸素が持ちませんと言ったのに」

ジャケットの襟を直し直し。

「カートはプウンじゃないでしょう」

運転席からマチダを引き摺り下ろし下ろし。

「マチダさん、思い出が妄想の実体であるならば、今ここに存在している全ては過去ですかね、ミライですかね。どっちでもいいんですが。そもそも妄想に実体があるなんて馬鹿馬鹿しい。こんな話について真面目に語るなど馬鹿馬鹿しい」

再び、次第に音が大きくなっていく。

「お客様、起きてください。お客様」

マチダ、急に飛び起きる。

「死んだかと思った」

「ミライまで行く途中に死んでもしょうがないでしょう」

「急にうるさくなった。どこだ？　ここ」

「もうすぐ宇宙を出ます」

「宇宙を出る！？」

「失礼。宇宙っぽいところを出ます」

「宇宙っぽいところを出る！？」

「ええ」

「ええ？　もう戻れないのか？」

「もう戻れません。諦めてください」

「煩いな」

「そんな事より、支払いのご心配をされた方がいいんじゃないですか」

「支払い？」

「タクシーですから」

「いくらなんだ」
「着かないと分かりません。GPSが効かないんで」
「衛星は近いのに！」
「近ければ電波がよく届くわけではないでしょう！」
「平均いくらぐらいなんだ？」
「さあ、まあ、1時間分くらいじゃないですかね！」
「時間じゃなくて、金額だよ！」
「金額じゃなくて、時間です！」
音がどんどんどんどん大きくなっていく。
「ああ！　そこ！　そこに停めてくれればいいから」
「あそこですね！」
「ああ！」
「ご乗車ありがとうございました！　お客様のお支払いは……」
明るい！　そして暗転。
沈黙。

明転。運転手が車で寝ている。
クロサキが1人、タクシーの横で立ち止まった。
右手を上げる。陽気なメロディー。しかし目の前の運転手は気がつかない。クロサキは窓を叩く。コンコンコン。運転手は起きない。
「ちょっと、ちょっと」
唐突に、目覚まし時計が鳴り響いた。運転手は飛び起きる。辺りを見回して、状況を把握し、一息ついた。ふと見ると、クロサキが窓越しに主張している。
義務。後部座席のドアが開いた。クロサキは乗り込む。
後ろ頭の運転手が聞いてきた。
「失礼。ご利用ですか？」
「見て分からない？　寝てないで仕事してよ」
「すみません」
「寝不足？」
「いえいえ、ちょっと、ミライまで行ってまして」
「ミライまで？」
「ミライまで」
「ああ、そう。目を覚ましてから出発してね」
「いえ、目は覚めてます」
「そう？　なんだか夢見がちみたいだけど」
「ご存知ですか？」
「何を」
「タイムマシンです」
「超時間機械？」
「ええ」
「この車がそうだって？」
「ええ」
「ええ？　どこからどう見てもただのタクシーだけど」
「いえ、目覚まし時計と、密閉空間。立派なタイムマシンです」
「どうやってミライに行くっていうんだ？」
「目覚まし時計をミライにセットして、寝ていれば着きます」

「あっそう」

「解っていただけましたか」

「全然」

「残念です」

「まあいいや。とにかく、安全運転でね」

「ええ。どちらまで」

「山口市ひら……」

「すと————つぷ！」

END